

「あっ、あのっ……、落ち着いて下さい？」

それは、突然だった。

「落ち着いて……っ、とりあえず落ち着きましょうよ、落ち着いてっ、お願いします落ち着んだっ！ 落ちっ……おおおおおっ!？」

ガシヤラっ、ガシヤンっ！ がしやぁあっ！

「なに呑気にほざいとるんじゃボケええっ！ コッチは金だせって言っとる、フウ……っ、フウ……っ、早よ金ださんかい、はよっ！ ワシは金が必要なんじゃ、はよおおおおっ！」

しがないスーパーのレジ、俺は襲われていた。

どうやら強盗らしい、閑散とした場所に2人きり、相当に興奮しているオッサンに突然ナイフを向けられている。

ちなみにだが、俺、店員ではない。

「いや……っ、あっ、あのっ、だからレジ……でしょ？ 開け方なんて分からないんですよ俺……っ、だって友達と話しに来ただけっ、店員じゃないんです。コッチ側でも店員じゃないんですってっ！」

「はあっ!？ そんなもんなんとかせいやっ！ なんでも良いからサッサとやらんかい、コレ開けるや早よおっ！」

ガチャガチャガチャッ！ ガチャっ！ ガッがっ、 ガッ！

「クソっ、クソっ、はよっ、ふう……っ、ふう……っ、何しとる…とにかく金、金だよっ！ すぐ用意せよこのクソガキやっ、なんでも良いからはよおおおっ！」

ばきいいっ！

「ウッ!？ うう……、何でも……良い訳ないでしょう。だから……っフウ……っ、フウ……っ、落ち着いてってえ」  
エプロンさえ着てないでしょうよオレえ……。

突然湧いて来て一人興奮し、暴力とヨダレまでまき散らす手が付けられないオッサンとか、  
そういうとてつもない不運を味わう俺。

ちなみに備考、財布には 121 円。

色々なつらみを痛い位味わっていると、更なる声が……。

「あぁいや、おいっ、何してんだオッサンっ！ ヤメろっ、やめろおおっ」

親友が助けに入った。

慌ただしい乱闘。

罵声が入り交じって物が飛ぶ、だが直後、逃げているだけの俺に完全な流れ球が、不幸の  
始まりが……。

「うらぁあっ！？ 邪魔すんなやボケー——っ」

ひゅっつ、どすっ！

「うううううっ！？ ぐふっ、うううっ……——」

ゆっくりとかがむ俺……。

どたっ。

腹部を刺された、血が、滴っていく、たくさんだ、たくさんたくさん……。  
逃げてくオッサンの足音、親友が耳元で……、必死に叫んでる………よな。

その叫びは悲痛な物から、やがてだが……異様な………——。



『ほのぼの不死者』

大学生の冬、3回生。

ひよんな事から奇妙な血が溢れる事になる、その前。  
俺は6畳無いボロ屋の一室、我が家でうなされていた。

「ンッ……んうっ……熱い……体が熱いよ、ハア……っ、ハア……っ、すごく熱いんだ助け……てえ……っ」

「そっかぁ～、じゃあたーくさん出しましょうねえ、ほら」

ヌゝルルン……♥

「あゝうう……っ!？」

「んう……んぢゅっ、ふっうっうぶっ……ぐっ、ふう……っ、ふう……っ、んふふっ♥」



下半身が唇にムチャクチャにされる感触、最高。  
睡魔と熱さのコラボレーションが際立つ、寒い寒い冬の朝。  
温かい何かに突然襲われ布団の中で悶えているが、それは案外慣れた物でもあった。  
俺が寝ていると時折シテくれるご奉仕だ、朝勃ちがヒドイと特に彼女が激しくて……。

「あらあらあ……♥ 今日はいつにも増してすごいかも、こんなに硬くなってるんだね～、  
ハア……っ、ハア……っ♥」  
すごいよ、む……ふう、、ンッふっ、ぢゅっぶっ…うぐっ。

(う`っう`っ下半身がすごい……、ヌルヌルが、ヌルヌルしたのが……ああ、ヤバっ♥ 気持ち良いよチンチンがあ……。)



「硬くて立派だね、格好良い……♥んふふっ、やっぱりすごいよ私……好き、この子大好き、あぶっ……ぢゅっ、ンッふっんふっ♥ あむ……ぢゅっ♥」

ズルルとした舌が俺の亀頭を可愛がり、そして敏感な肉の棒を這いずっていく。  
そのヌルヌルした感触と、舌特有の何とも言えない粒立ちの良い感じが、俺のチンポを容赦なくねぶり上げてくる。  
しかもこのフェラチオ、朝から吸うんだぜ？

「ぢゅッ……、んぢゅふっ、ンッふっ！ ンッンッむぢゅっ……ぐっ、ううっ、でもすごい……、朝はいつも元気だよねえ、いっぱいお汁出てくるよ」

「ハア……っ、ハア……っ昨日あんなにしてくれたの……、じゃあ、私がしなきゃ、全部……全部だ、はぶっ、ぐっンッぐっ……、うぼっんぢゅっ……ンッ♥」

ススられるとたまらない、カリ首を唾液まみれで吸い付かれるエロさよ。

しかも寝ているのでヤラレ放題、俺は肉棒に這う舌の動きだけに敏感になれた、見えてい

ない物には神経をとがらせるのだから。

ヌルヌルとした舌が容赦なく舐め回してまた、汁まみれにしてしまう……。

「むぢゅっ……ンツぐっ、ぐっぶっ、ふぶっ……ンツ♥ ビクビク……してる、朝からすごい溢れてるよ、もっともっとシテ上げるから……」

(ああ……チンポの先っぽが全部飲み込まれて……ウツ、ウツ、熱々の口のナカで逃げられないんだ、離してくれない、苦しい位……。でも、こんなに良いよ、ヤバい♥ 彼女に下半身を勝手に侵略されてるのにい……。)

「ドンドンと口のナカで大きくなってるね♥ まだ、膨らんでこんなに……んぢゅ……ウツふっ、んっぶっう♥」

「ハア……っ、ハア……っ、私ね、我慢できなかったの。彼氏とかもったいないとか、騙されてるとか酷い事……好き勝手言うから……ンツ……んうっ♥ むぢゅっ」  
彼女はうっとりチンポ見て……。

「だから友達に彼氏は大きいって言っちゃった♥ でもね……ごめんね、もっとたくさん良い所あるのに……、……んぢゅっンツふっ♥ んっんっぶふっ……ぶっ」

「んお……っおふっ、むっぶっうぶっ……ぢゅっ、アナタは地味だけど、優しくて堅実で、頭もよくなって、それで……やっぱり、大きい、んふふっ♥」

ぶぼっ♥ ぶぼっ♥ ぶびゅり、ププっ。ちゅちゅっ、ヌルルルルルう……♥

しつこくしつこく先っぽを吸って、お口ピストン、先走り汁もすする音が外にも漏れてる。吸い付くされてしまいそうな大人フェラに夢心地の俺、ヒクつきが止まらない。お口の緩急も自在、おはようフェラは彼女に主導権があって、目一杯愛されて……。

「ああ……大きくなり過ぎかな、ヒクヒクしちゃって、可愛♥ はあ……っふう……っんふっ……ンツぐっ、むぶっ……ンぐ、んっおっ♥」

「でも大丈夫だよ、ほら頑張っ、むぶっ、ンッあぁ……っ、ンンンンッ♥ まだ駄目だよ、もう少し頑張ろ、ねっ♥」

もう2年以上付き合った彼女だ、全てがお手の物、俺のおチンチン管理なんてのは日常の範囲。

いつもの彼女の感触、良い匂い、今日はオッパイ出してるのかもしれないな、柔らかい。陽香（ようか）は先っぽに吸い付きながらタマタマにオッパイ擦って、迫るように……。

「んぢゅっ……ぐっンッふっ、むぶ……ンッ、生臭い、いっぱい夜に溜まった分だ、はぁ……っはぁ……っ」

でもこの臭いって私、結構……ね、うう♥ スう～～～——……っ。

（うわぁ……っ、めっちゃ嗅がれてる、チンポ下まで舐めて密着しながら……ウッ……ウウっ、恥ずかしい。それに舌も熱いのが……そんな所に入っちゃすごいよ、陽香……陽香ぁ……。）

「すごい臭いだよねコレ……、精液もそうだけど、タマタマも独特で良いのよ、、むぼ……っ！ あふっっぢゅっぶっ、んうっ……ぐ——っ♥」

スンスンと嗅がれる感触と共に、根元を舌で舐め上げられて思わず声が出た。ヨダレまみれのヌルヌルが股に入ってくる感触、と同時に男でも恥ずかしい球を、そして根元部分までもを舐めてもらえるエロさ。ジュルジュルと生々しい舌が根元で上下し、彼氏の俺のチンポに吸い付いて離れない。

「はぶ……ぐっ♥ ンッぐっぢゅぐっ……ぐっお、太くて、大きいよねえ、ホント、そうだよ……私、このチンポに駄目にされてんだぞ、もお」

「ハア……っ、フウ……っ、大学の中でとかいっぱいさせられて、もう……、いっぱいあんなに……うっ……ううっ、んっ…ぢゅっ、、むっウッんうっ♥」

美少女なのが悪いのだよ、彼女氏よ。

まるで青春を取り戻すかのようにやられまくった陽香が俺のチンポを睨み、言い聞かし、舌で肉棒を分らせてくる。

先走り汁が出ると切なげに息を吐き、ヌ`メヌ`メ繰り出される舌は熱くて熱くて……。

「布団の中もう……エッチな匂いで溢れてきてる、私、アナタの精臭染みついちゃいそうなのよ、ンうッ……んふっ♥ んぢゅっぐっぶっ、ふぶっ……ンッ……んうっ」

そして彼女も自然と割れ目に指をやっていた。  
ムラムラとした精の熱気で女体をあぶられてしまう、冬の布団の中。  
吐息が荒くなってるのを感じると共に、舌の吸い付きが増す、コレは肉棒実感としてだ。  
彼女もラストスパートするべく激しくお口ピストンをしてしまい……。

「欲しい……精液出しちゃおっか、ね？ ほらほら出しちゃって～、お目覚め射精だよ～、ほ～ら……んぐふっ…あぶっ、ぢゅっぐっ、ンッ……んうっ♥」

「あっあふっ、アッはっアっ……ああんっ、精子……早くちょうだい、濃くてクサいの好き、好きだから、朝のおオチンポお……」

なんとなくだがヤラシイ音が増えて、すごいエッチな気持ち。  
先っぽジュルジュル吸いながらもヌメヌメ舌の乱打、暴れまくって気持ち良い。  
正直もう8割方起きてるが、だが最後はやっぱり夢見心地で射精がしたい、彼女の献身的な精飲を期待して放流だ……。

「あッ♥ ああ出ちゃう？ 出ちゃうの精液、むぶっ……ぐっ！ いっぱひ出してね、いっぱい……いっぱいだよ、じゅっうぶっウッウッううっ♥」

「うっ、うう……陽香あ……」

びゆるるっ、びゆるっ、びゅっびゅっびるるっ、びゅびゅっ！ びゅうっ！

「んううー～っ………、フウ……っ、フウ……っ、たくさん……っ、臭いの出てふね、お`ふ……っ！？ ぐっぢゅっ、うぶうっ♥」

ジュルジュルとすすられる感触と共に、チンポ付近の熱いのが動かない。  
今大変なんだろうな……だなんて、他人事のように浮ついてビクビクと跳ねるだけ、開放的なオハヨウ射精で天をあおぐ俺。  
可愛い彼女がわざわざ家まで来て、フェラして飲んでくれる幸せに包まれてると……。

「んっつ、お早う、起きたね、フウ……っ、フウ……っ、ふふっ♥」

「ああ……陽香、おはよ。来てたんだ……。全部飲めてるね、すごいよ、ふう……っ、ふう……っ」

エロお……♥

やっと目の前、大学生になり、人生で初めてできた彼女がお目見えした。

やっぱり可愛いわ……。口元を汚した俺の精液を拭って上げる。

だがキラキラの陽香にひきかえ俺は正直、取り柄らしい物は全部全部が地味。

頭はまあ良いと言えるけども、身長そこそこで体力あまりない、顔は中の中だと信じてる。

ただ、下半身には自信があったんだよ、ねえ陽香？

「ああ……。すごい、やっぱりまだ大丈夫だよ、この子。ホントに偉いよ頑張れる子だもん、フウ……っフウ……っ」

カッチカチだあ……♥

よっしょとすぐに俺の上に乗れ、おチンチンの具合を興奮した顔で調べてくる彼女。

陽香と付き合った最初の頃はもう、俺がココぞとばかりに色々ヤッてヤッてやりまくった。

だが今は満足してくれてる自信があるんだ、何せ彼女自身が積極的に搾ってくるのだから。

キスして来て、彼氏の俺に笑ってそして、恋人チンポに切なげにコンドームをかむらせ……

…。

「ゴム無し、したいよね、ごめんね……。ハア……。ハア……。私もシたいよ、アナタのナマで欲しいもん、んっ……。んうっ、ンッあっ、あふっ……っ」

擦っただけで待ちきれず、ズブズブ入らせてく……。

「ああでも……。ホントはあの、でもね、その……。ああ……。ううっ♥ 今はまだ私、ンッ……。んうっ！？」

「ああ、良いよ陽香あ……。俺達まだ学生だしね、ゴムあっても当然だよ、良いんだ気持ち良い……。それにさ、どうあろうが君のオッパイもエロいし大きいんだよ、ふひひっ♥」

「あうんっ♥ アッはっあうっ、やっやだ、入ってる途中で挿んじやっ、起きたばっかなのに強い……。よ…ンッ……。んううっ♥ んあ……。っあふうっ」

彼女が自らナカにくわえ込んでくれる様子に、オッパイを揉みほぐして喜びを伝える俺。  
そのままキュンキュンとしまる穴のナカに入ってく。  
非常に汗が濃厚で大人っぽい肉ヒダに挟まれる肉棒、その気持ち良さにヒクついた。  
陽香のナカはムレムレで、粘着的な吸い付き方をしてくる大人な肉穴で……。

「ああ……んうっ、うっ……んう……——入った……ね、奥、ハア……っ、ハア……っ♥ 太いよ、アナタのおチンチン、私好き……コレ、この子すごいから」

「俺も陽香のナカは大好きだよ。すごいネバネバしてお肉が絡むんだよ、ああ……すごいヒダヒダがかき混ざるよね、肉まみれになってる感じがして最高だわ……。じゃあほら、動いて、ほら陽香もっとうっ！」

「アッああんっ♥ やっあっはうっ……ううっ、突いちゃ、そんなに焦っちゃ駄目だよ、太くて凶暴だからこの子おっ♥」

ズボッと突き込んでやると早々にエロい音を立て、ナカでかき混ざってく感触を楽しむ俺のチンポ。  
未だ眠気から冷めきってないが、それでも、腰さえ動かせばチンチンが気持ち良いのだ。  
腰だけ元気で肉欲を欲する大学時代、突いてやると彼女も腰を振って跳ね始め……。

「アッあふっ、あっああんっはっあっ、あううっ！ でも、良いよ、やっぱり突いて良いの、私もすごい……ウッううっこれ、性欲ドンドン湧いちゃうからっ♥」

「アナタの良い♥ 連続なのにな、それでなんでこんなに硬いのコレっ、ンッンッんあんっ♥ あっ……はひいっ、こんなの覚えちゃうとヤバイよ私いっ♥」

「そうみたいだ、もうキュンキュン締まるよね、陽香のナカが。ウッうう……、すごい肉感、ヌルヌルがネバネバで絡みついているわ〜。でもこんなに、フェラチオだけで興奮したんだ陽香は、ふひひっ♥ ほら、どうだエッチな陽香、どうだよチンポは、もっと奥欲しいだろ？」

「ひっ……ひいっ！ はひっ、はっあっあう……ぐっんっ、奥っ……奥そんなには……、奥は厳しいの、そんなに硬いの奥うっ！」

「突き上げちゃ、突き上げちゃだめなの、ああ……ウウっ！ あっあんっウッ……んああ

ツ」

目を見開きながらもチンポに合わせ、陽香は気持ち良さそうに必死に腰を下ろしてくる。比較的どころか、マジずっぽり、しっかり入らせてくるその肉に嗚咽してしまう程。ネバっとしたジユクジユク肉穴の圧に包まれ、割れ目の入り口をもうお腹で感じる程に擦り付けてきて……。

「ンッ……おふっ…おんなっあぁっ♥ エッチ回数とか友達に、ウソついちゃってるんだよ、ウッ……うう、だって毎日とかじゃない、もう……おかしくなるくらい私い……」

「彼氏、すごいって言ってあるけど、絶対…こんなの……はぁ……っふう……っ♥ 入らせないと分かんないよ、あんっ、あんっ、あんっアンッああんっ、すごいのおっ！」

「うへへっ、良い腰使い〜♥ でもそうか……、初めの頃は教えられてばっかだったけどさ、この頃はやっぱ押せてるよなあ。だって突いたらすっごいウネるようになってるよお前のマンコっ、陽香の奥がびっしょりネバネバで音が途切れないもん、ほら……っほら響いてる！」

「アッ……ああんっ♥ 上手く……なってるっ、ていうかもう、完全にフィットさせられてるうう」

怖い位だよ、なんで……っ。

「ううっ……っウぐッ、ウッうっ、こんなに良いのっ」

「初めの頃から大きかったけど、コレ、失敗かも、育てちゃって……アッ♥ あぁっダメえ……♥」

びびくっ、ビクンっ！

キュッと肉ヒダがこぶり付き、痙攣する感触。

そのままだが陽香は腰の振りを激しくした。

ズっポリとくわえ込んでは俺の肉棒をナカで回し、擦って、自ら奥を突かせてと……。

「ハア……っハア……っ、あっううっ♥ ンッあっああんっ、もっとシタいの、ココ……良

い？ どうか、気持ち良い？」

「おう♥ 激しいね陽香、ヨダレ垂らしてまで……ウッうっ♥ これ気持ち良いけど、でも、もう泡立ってきちゃってるよおマンコ、エッチだ〜。ああ〜ヤバいわ……。深く挿すと溢れて愛液でひたひたになっちゃってる、チンポにもびっしょり♥ 音も鳴りやまない」

「アッアッアッ、ああんっ♥ そうだね、恥ずかしいよ、ただ…それよりでも、ココー階で良かったかも、絶対抜けてたよ床」  
ベッドだけ、沈んでる……。

「はあ……っふう……っ、確かに。でも出前の人とかに気づかれたの何回もあった、アレ……結構ヤバイよね、覗かれる事もあったし。エッチな音だけでも気づかれちゃうんだもん。陽香のおマンコはエッチだからなあ……♥」

「やあんっ、それ言っちゃダメなのっ、恥ずかしっ……よ、ンッ、んうっ♥ ンッあっ、あふっ……ああっ、あんっああんっ♥」

ぎしっ、ぎしっ、ぎしっ、ぎしっ、グヂュッ、ぎゅみっ、ぎゅっぎゅっ♥

彼女が腰を使うたび音がし、エッチな濁った音と共に軋むコレはベッドが悪いんじゃない、部屋自体がボロいのだ。  
結構音が激しい、部屋が軋む、だがやめられないセックス、ズボズボ、ズボズボと……。

「ああんっ♥ アッはっ、あっあっああっ♥ もっと……、もっと擦ってえ、もっとアナタのチンチン漬けにしてよお♥」

「良いよ……陽香、可愛いな、必死になっちゃって……、相当気持ち良いんだ、気に入ってくれてる、良かったっ、ふひひっ♥ でも大学で初めてできる彼女がこんな可愛いなんて思いもしなかったわっ、陽香は本当に可愛いよ……。どうだ、良いか俺のチンポは、俺以外じゃ満足できないようにしてやるっ！」

「あふ……ンッあっ、ンッンンぐっ……ふっ、アナタのおチンチン良いよ、好き……、一番好き、コレは誰にも渡さないからっ」

「だから、絶対に浮気は駄目だからね、泣いちゃうじゃ済まないもん、ハア……っハア……っんぢゅっうっ、んっぶっ、私はもう好きとかじゃない」

愛、だよ……—。

濃厚にキスして来て、おマンコの締めりがかなり強くなる彼女。  
マンコしながら舌を絡めて何度も何度も唇をすすって、ペロを挿入し、色濃く交わった。  
俺も興奮してる、彼女に深く深く潜って突く、突きまくる、柔らかい陽香のケツを抱き留めながらのペロキス、ラブ、セックスだ。

「激しいの……っんう……ンツあつ、むぢゅっ、ふっウツ♥ でも良い、いっぱい突いて、キスもしてっ、口塞いでくれればいっぱいいいっばい良いのおっ」

「そうか……んっンツんぢゅっ。そうだな、あんまり叫ぶと色々聞こえちゃうからね。だからいっぱいキスしてシよっ、陽香、俺の陽香あつ、愛してる……っ！」

「むぢゅ……っうっぐっ、ンツンツんなっ、あうっ…んあうっ♥ キス、上手♥ おマンコ上手うっ♥ ごめんっ、ごめんなさい、全部良いよアナタがあっ！」

この6畳に満たない貧乏部屋、金もあまり無いし隣うるさいし学生同士、だがソレも良い。ココだからこそ、ヤレる事はヤッておける気がした。  
冬は愛し合って温め合い、夏は水風呂に入りながらでもエッチするのだ。  
汗だくの2人で手を取り合い、学生時代の青春を全て性に変換して燃え上がっていく。

「アッああんっ、お尻浮いちゃう位突かれちゃ私、感じ……っ過ぎちゃうよ、アッアッアッ……あううっ！？ ああっ♥」

「グチュグチュ、ザクザクすごいよ陽香あ……♥ 陽香のナカが俺のチンポで掘られてるっ、イヤラシイ音が鳴り響くわ、お前とのセックスは本当に手応えあって気持ち良い……っ！もうさ、大学生も最後が近いけど、もっとしよ……、もっともってエッチしたいよ陽香あっ」

「はい……、もちろん♥ 明日も明後日も……。私、アナタとセックス、エッチ漬けなの、はうっ……！ ウっぐっ、アッアッああんっ♥」

「一緒に居ようね、何があってもずっと、ずっとだよ、はあ……っひいつ♥ あひ……っ、あんっあんっあんっ、んあああっ♥」

あえぎ声のがびやかに伸びて響き、大きく大きく震えた俺の彼女。

おマンコがぎゅぶっと締めを強め、チンチンへの吸い付きにも熱さが増していく。  
大学生で大人な彼女、そのチンポ穴がムレムレでジュルジュル、おマンコに溶かされるように擦られれば肉棒から……。

「はう……ウウうっ！ ンッあっあふっ、イク……？ 私はもうイク……かもっ、もうイク、イキたいよアナタのおチンポでえっ♥」

「俺もイクよ陽香……っ！ お前のナカでたっぷりイク、たっぷりだっ！ ほらほらほらっ！ しっかりスパートしてっ！ 俺も全力で……ウウっ♥」

「アひッ……アッああんっ♥ はっあっ、はい……っ、出してね…出して、アナタのおチンチン汁でイキたい、私いっぱい欲しいの♥ アッ……あぁーっ」

びゆるるっ！ びゆるっ、びっ、びるるっ、びゅずるっ、びゅ……っ！ びゅうううっ！

ビビクんっ、びくびくっ、びく……くんっ！

「イク、イクー……っ！ ——ハア……っハア……っ、駄目……すごい、朝からムチャクチャにされちゃった、また……っフウ～……♥」

終わっても気持ち良さげに俺の腹の上で跳ねながら、ヨダレを垂らしてしまう大学生カノジョ。

俺も出し切りしたいという快感から、彼女のナカで、その潮まみれの膣で必死にうごめいていた。

その感覚に笑う彼女。

「もういっぺん…する……？ 全然大きいよね、3度とかでもへっちらだもんねえ……、んふふ」

そういうと肉棒が満足したのを見計らって、いつものように丁寧にコンドームを外してくれた。

幸せそうだ。

「すごい量で濃い臭い〜……っ、ふう……っふう……っ、ああ、なんだろ。もう今日はワタシ、失神するくらいまでしたい……、だってもう12月だもんねっ♥」  
温めあいたいよ……。

その可愛い仕草にオッケーオッケーな俺、撫で撫でシコシコしてくる彼女にキスしてベッドで一日中……。

「アッ……！？ 駄目だ、今日は確か大学行かなきゃだったわっ！ 奨学金の申請漏れとか、あとあとっ、就活の内々定の話で教授に相談してたんだ、俺、行って来る……っ！」

「ええ〜っ、なんで、もう別に良いじゃな〜い、大学とかもう終わってるんだよ〜？ 折角テスト済んだばかりだし、内定だってもう3件目取ったのっ、どうせ就活だって来年もするんでしょ〜……？」

「ああまあ確かに……」  
ふむふむ。

「でも就職だけは大切な事だよ〜、お金は絶対必要だっ。だってこのご時世、どこの企業も続くとは思えないんだよ？ 不安だ……っ。今はもうしっかり次に繋がる所を選びたいっ！ ああ……そうだよ、どうなるやらこの不況」  
海外勢でさえも微妙なんだぞ……。

ブツブツブツ……。

「ああー……始まっちゃった。でも1日休んだって変わらないよ〜。それに出世したいとかじゃないよね〜、安全そうな道を探してるだけでしょ？ じゃあさ……、まずは私との安全、考えようね♥」  
ええーっ！

キスして押さえ込んでくる彼女氏と俺は、第何十回目、イチャコラ・プロレスリングを開幕させる。

だが俺は苛烈な先手を浴びせてみせたっ！

「だが陽香っ、俺は安全な所を得る為に努力を惜しまないっ、採用される幅が欲しいんだっ！ 転勤も嫌だが、まあ、頼まれれば全然大丈夫だよなっ、だってお給金も上がりやすいっ！ 俺は若い内に給金上げとくと良いと思うんだ、転職も優位になるっ」

「うう……っ、でも転職する気ないし、ずっと居座るんでしょっ、もう大手も入ってるじゃないっ。だったら私も居座っちゃうもんっ」

「ああそうだよ、居座るよ、普通で凡才の俺はしがみつ়く力が大事なんだっ。だって実力主義だと厳しいなあって正直思うんだもんっ！ 思っちゃうんだモンっ！」

「うう……強い……っ。でもそういう思考で大学3年っ、最速で単位終了させたじゃないの、もおっ！ その癖いらなくなった卒論まで書いてるっ、皆がしてるとかでさあっ！ アナタ十分だって、きっと大丈夫だよおっ！」

「いや……いやいやっ。俺は最後の最後まで手は抜いちゃダメなんだ、勉強と仕事は違うからねっ！ それに何より……そうっ、この時期皆も就活してるっ、だから俺も列に並ばなきゃ、そうだよ……っ、それが普通っ！」

「アナタ時々普通の概念おかしいよおっ！ 今日は私と一緒にいるだけで良いってば、それだけだよっ！ ほらもう諦めてええっ！」

悲痛な彼女の叫び。

だが今回は俺氏が押していた、だって最愛の人には俺のこの、普通への意気込みは分かかって欲しいっ、分かかって欲しすぎたのだった！

「仕方ないんだよっ！ だってもう少しで終身雇用が終わっちゃうっ、大変だ……っ、大変過ぎるんだっ！ はあ……っはあ……っ！？ 俺も終身雇用が持ってたならっ、それならって……っ、ふふっ、思うよね」

だがしかし、時は待ってくれぬっ！

「俺には普通になる為の努力がっ、その為に合わせる力が必要なんだよ、分かって欲しいんだ陽香ああっ！」

「やっ……っ、あっ！？ ああんっ！？」

どたっ！

「ふう……っ、ふう……っ、ホント、普通思考だよ、もお～……。でも……それも良いかもって、ふう……っ、ふう……っ、ふふっ。もお～～っ」

プロレスに疲れ、彼女が手を離れた隙に着替えを……、いや、身を整えるだけの俺。

「ああそれにさ陽香、帰りは大学の帰りにスーパー寄ってかないとなんだよ～。アイツに貸したノートと、あと、いつものライブチケットを押し売りされないといけないんだ～」

「またあ？ 今月もお金ないんでしょう、2人仲良いよね、ホント……っ、妬げちゃうくらいだよ」  
まあ良いけど……——。

浮かない顔をする彼女が裸で抱き着いて来ている。

「陽香さあ、あんまアイツの事を邪険にしないでよ。だってずっと一緒にいるんだ、親友なんだよ。それにアイツのおかげで陽香と付き合ってる。色々とサポートしてくれてたって知ってるじゃないかあっ」

「親友……ねえ、ふう……。確か生まれた病院も同じなんだっけ～？ もうどっちかって言うと兄弟だよ、2人はさ。ただでも」  
2人って全然違うよね。

「あぁうん、そうだな、俺とアイツは確かに、一緒にいるのが不思議なくらいに全然違うよな、はははっ。えと、例えばだがそう……アイツは……」

指折り数える俺。

「好奇心強いしモテるし、その上明るくて人付き合いも良いし、それで何より喧嘩も無茶苦茶強いつ。その上女の子にモテまくるう……。ああ～、顔のデキはそう変わらないと思うんだがなあ……」

どこで差がついたのか、慢心、環境の違い、そもそも遺伝子。

「多分その普通思考だよー。ほらほら見てっ、顔に出てるの、普通です～ってっ」

ああ、彼女様、その言葉が一番来るわヤメて。

「ああ……でもまだまだあるかな。でもただの腐れ縁な気もするけど。妙に寄ってくるんだよアイツが」

彼女を抱きながら言うと苦笑した、アイツも同じ事言ってたってさ。

「でも全然負けてないと思ってるよ私……。だって良い所もいっぱいあるんだもん、ちゃんと。優しく好きだよ、私はアナタの事。ちょっと普通過ぎるけど～……。でもね～、アナタで良いと思ったの」

うん♥

何か考えるように笑う陽香。

仲良くし過ぎてほとんど同棲みたいになっている俺達は、笑顔でいってらっしゃいのキスをした。

「そっか、ありがとう陽香。じゃあ帰るのは少しだけ遅くなるけどね、晩御飯はあると良いなあ～、俺」

「ふふんっ、分かりましたっ。じゃあ帰って来てから作って上げるね、温かい方がいいでしょう？ 待ってるからっ」

「あぁうん、ありがとう」

そう言ってまたキス。

そのあと靴をはいてガチャリとドアを……。

「あっ！ それでねそれでねっ、私大事な事を言わないといけないから……。あの……っ、あぁ～……でもコレはそっか……。帰ったら言おうと思ってたんだけど、その……っ」

――。

――。

「私達ってもう大学最後じゃない？ でね、ワタシやっど……っ、アナタだけ」

ガタンゴトンッ！！ ガタンガタンッ！ ガタンゴトン……っ！

ボロアパートのすぐ隣を、五月蠅い電車が通過していく。

踏切も近いから警笛まで鳴らされるのだが、しかし、なんとなく俺はこの音が好きだ。

貧乏生活なんだと実感できるし、その癖彼女は居る、まだ学生、良いじゃないか。

「ごめん……っ、聞こえなかったわアレ特急か～……、ふっ……ふふふっ」

はにかむ彼女と俺。

それに、その日差し込んだ夕焼けはとにかく綺麗で……。

「ああ……——。うん。でもまあとりあえず帰ってから聞くよ陽香、しっかり聞く。じゃあ行ってくるね〜」

「そうだね、うんっ、行ってらっしゃーいっ♥」

そう言って俺は出かけた、幸せな予感を残して……。

そして今、俺は血まみれのままで呆然と立っているのだった。

一連の顛末として残されたのは、命の雫がほとんどこぼれてしまった肉体と、そして下にたまったお手製の血の池地獄だけ。

「ああ〜……、びっくりした」

「いやっ、びっくりしたのはコッチだっての、なんだお前不死身か、普通じゃないぞっ」

「いや普通だよ俺……——」

反射的に言ったその言葉に頭をかき、苦笑いすると親友も頭をかいた。

その後2人で真剣に考えて色々検証するのだが、問題はなさそう、ただし謎。一つ分かったのは大地が俺の血を受け入れなかった事だけ。

どうしてかは分からないがこの血、一ミリも吸収されないのだ。

「ああ～ああ～……、コレなんだよ、ぜんぜん吸えねえぞ～。拭いても拭いても逃げてく、意味ねえわ。なあコレどうする～？」

「あぁー、俺に聞かれてもなあ……。でも確かに面倒だなコレ。雑巾で拭けないしティッシュもだめなんだが……っ！　うう……っ」

奇跡のような血液、前代未聞の命の雫もココまで邪険に扱われるとは思ってなかったろう。

何せポイッと雑巾を落とし、血に浮かんでいる布を裏返しても驚きの白さ。  
ひたすらに手ですくってバケツに入れていくしかない俺達。

「これ、何ゴミだろう……」

「さあ……」

親友の手に持たれたレジ袋に、心底から疑問顔の俺。  
とりあえず親友が持って行こうとする、とそこで、突然背後から叫び声が……っ！

「ぎゃーっ、たッ、たたりじゃあっ！？　ドラゴン様の祟りじゃーっ！」

ぶへ——っ！？

\_\_\_\_\_。

「えっ？　あぁうん、大事だろ？　きちんと言っといたほうが良いよな～、って、ちゃんと仕事は済ませないと」  
危なかった～～。

何が危なかったというのか、親友よ、痛いじゃないか傷口が。

しかも友達の明らかに迫真の悲鳴に笑いが出てきてしまい、更にムカつくぞ。

「ふっ、ふふっ。あはっ、あはははっ、お前っ、お前なんだよそれっ、なんかオッサンくさ～……っ！」

「いやっ、いやいやいや……っ。むしろこれ以外に正解があるのかと、俺はただ正解を、正解をだな……ふふっ、ふふふっ、はははははっ」

ひとしきり笑いあった後、迷惑かけたからとコーヒーを一杯おごってもらう。

迷惑（死）。

「あっ、でもお前……っゾンビじゃないだろうなあ、噛んだら感染とか勘弁してくれよおっ」

「……多分、な」

結構しっかり開けっぴろげてる傷口を見やる俺達。

要は、そう、不死であり怪物なのだろう。

大量の血を拭いた手、それでコーヒー缶を撫でてしまった親友に肩をすくめる。

「それで、なんだと思うこの血。感染症かな～、もしくはやっぱ呪いかなあ？」

「ああ～、呪いじゃね、やっぱりさ」

「そうだよなあ～……」

ずずっ、ずびびっ。

「ああじゃあ俺……、飲んだら帰るわ、そろそろ時間だ。ライブ、ちゃんと行くから」

「えっ？ ああ良いけど、たださ……、もうちょっと待ってろよ、お前の彼女よんじやったわ。さすがにさあ……、うん」

その親友の言葉に初めて緊張が走る。

確かにあの状態だと彼女や家族には知らせるべきだと、そう思って問題はないのだが……。その後すぐに、スーパーに駆けつけてくる彼女。

「あっ、ハア……っ、ハア……っ、大丈夫っ、ねえっ！ 大丈夫なの、電話あったけどっ！」  
真っ青な彼女の顔。

ただやっぱり気恥ずかしいというか、どう話せば良いのかと……。

とりあえず恐縮しながら2人してあの血と、そして傷跡を見せて……。

「エッ、えっ！？ ええ——～～……………」

固まる彼女、まあそうなるよな、うん。

袋に目一杯の人間の血、それが大地にしみ込まないという現実と、そして問題無く生きていくという事実を前に……。

「そっ、そう……なんだ。それじゃ、それ、どうすれば良いのかな私は——」

「うん、分からん。分からんのだよ陽香ちゃん。ひとまずだが……そう、帰って血を流して綺麗にしてー、それでレバーでも食って補給して～……。それでそのあと、寝た方が良くいんじゃないか？」

「そっ、そんな簡単なのっ！？ コレ、冗談言ってる場合じゃないのよ、こんな異常な状態を見過ごすっていうのっ！？ こんな異常よっ、絶対おかしいのこのヒト……——ッ」

——。

—————あつ、ああ、ごめん……。

「いや、良いよ。でもとりあえずでも帰ろうよ陽香。傷口が大して痛くないのも今の内かもしれないし、本当に様子を見た方が良い」

うなずくと、おずおずとうなずき返してくる、そのまま2人して帰った。

そしてそれはある種無言の帰宅となる、話す事はたくさんあるのに、どっちも話し出さない無言。

ガタンガタンっ、ガタンゴトンっ……。

「はあ……はあ……ふう……——っ」

隣の線路で電車が通って、冷たい空気が舞い上がる。

いつもは好きな風景、大好きな彼女、だがその時は空になったコーヒー缶を大事に両手で、ひたすら握っていた感触だけを覚えてるんだ。

そしてボロアパートに到着。

なかば習慣的に彼女の唇を……。

「あぁうん、その……っ、今日はやめとこ？ 傷口開いたらね？ 怖いからね？ うんそ  
うだよ……、そう」

「あぁ、そうだね、そうだわ……っ」

その日彼女が出してきてくれた料理は、何故か豪華ですごかったんだ。

ただ、2人は別々で寝た。

「あぁ……、少しだけ閉まってる、傷口が」

朝目覚めて、そして俺はとりあえず傷口を観察、安堵する。

その後彼女の強い勧めで一応医者にも行った。

ただし、なんか恐かったので血液検査だけだ。

「でも普通なんだよな～……、少し貧血気味なだけで、俺の普通は……——」  
そう、、普通かぁ。

俺はその、余りにのほほんとした結果に目を疑い、見入る事しかできなかった。

普通は大好きなのにこの普通はどうだ？

血は明確におかしいのに、ネットを探しても一切類似の事例はなかったのに、それでも何  
も異常がないと言われる。

その現実と悪夢の狭間のような感覚

それが恐ろしいと言え、恐ろしいのだろうな……。

「そっ、そうなんだ、何もなかったんだ、へえ～～……——」

彼女に言うが、あまり身が入った言葉は帰って来なかったよ。

もう数日セックスしてない。  
まあ結論はというとだ……。

「俺ら、別れようか陽香……」

「えっ、えと……っ！？ あのっ、いや……、突然どうしたのっ！ あっ、あのあの」  
大丈夫、だよ……？

「大丈夫大丈夫っ、本当に大丈夫だよ私、しっかりとコレから支えて行かないとって……  
っ。アナタのそばにいないといけないって、そう思ってるのにつ！」

「ああいや、違うんだよ、突然だけど俺、旅に出ようと思ったんだ。もっと考えたい、色々  
とさ……。人生をね」

その言葉にすぐに、ほどけていく。

安心したようにやっと笑ってくれる彼女。

「そっか……、大変だもんね」

大して大変じゃないよ。

「そうだね、それで旅でもして自分を見つめ直したい。こう……、なんていうか刺された  
時ね、俺は人生に対して大事な事を——」

うなづく彼女、でも俺は分からないよ、俺の言葉が。  
でもコレが、この姿が分からない位彼女は今、きっと……。

「ありがとうな陽香、今まで」

でももし運命があるならば、このまま俺の手をもう一度……。

「うん、私もありがとう、ごめんね……っ」

彼女はいちべつもせず頭を下げ、その日、二度と帰る事ない俺の家を後にした。

そして俺は少ない金を持って夜の町へ。

ひたすら安酒をかつくらってそして……。

「あゝ あ……、不死とかって眠くないとか、寒くならないとか、そういうの無いんだあ…  
…ウウ……——」

俺を普通じゃない生き物にした神、もしくは悪魔とやらは死を差し引いても、どうやら吐き気と寝不足、そして二日酔いまでは引いてくれなかったらしい。

凍てつく程の夜の大地を這って、必死になんとか家を目指す、不死の癖に。

「じゃあよお……っ俺には覚醒とか、そういうの無いんか……っ。ハッピーラッキーで俺ツェエエの異世界生活は始まらんのか……」

そして一人きり、貧乏で貧相な6畳一間。

広い広い部屋に……——。

「俺は……、俺一人でこれからどうすれば良い……。俺はなあ……っ、普通なんだよっ、俺の体は、俺は………、ふう……っふう……っ、陽香……—」

どううすりゃ良いんだよおおおおおっ！

「アッ？ ぶえっ！？」

えろえろえろ～～……—。

そして2日酔いで思い悩んだ結果、やっぱりホントに旅に出る事に決めた。

「それで、どうすんだよ旅に出て。ただ格好つけたいだけならウチに来いよ、かくまってやんぞ」

「おい、結構マジな答えはやめろ、恥ずかしいだろ俺が」

さっむい朝、マフラーまみれの俺が頭をボリボリかく。

タバコをふかしながら親友は、結構薄着で笑った。

「ふう～～……ふふ～～……、で、何すんだよ、本気で」

「ん？ 優しい大地を、な……。俺の血を受け入れてくれる砂とか土とか、そんなのを新しく求めようかなって、そう思ってる」

「なんだよソレ……。ふっ、ふふふっ。それってなんかそう、今から飛んでく綿毛みたいな感じさせやがって、可愛いじゃねえかよ～、んふふふっ」

「ああ……、綿毛、そうかもな、そんなに可愛くはないけどさ」

ただよ、俺らもう3年だからな、お前も笑いごっちゃねえぞ？

「んう～～？ んうううう～～～↓」

ふふう～～……—。

青空の下、白く濁る息、俺たちは確かに綿毛に似ていると、そんな気がしない事もない。

自分を受け入れてくれる、咲けるような土地を求めているのだろう。

こんな凍てついた大地に温もりなんてモノがあるのかは、今の俺には分からないが……—  
—。

「じゃあ行くわ……」

ドっドっドっドっ。

「なあ、ちょっと話したい事があるんだが？ それ、スクーターより自転車の方が良いだ  
ろ、自分探しならさ」  
青春って感じするべ。

「ああ～～……、いや、良いだろ。じゃな」

がたんっ、ぶろろっ、ぶろっ、ぶおおお————。

「じゃなあ～～、正月までには帰って来いよ、ふいい～……」

――。

――。

次は見つかるの良いなあ、お前の血が安静に眠れる場所。  
タバコを吸いながら親友は笑った。